

新しき学校への模索

松村光子



戦後の「公教育」と「仰げば尊し」

「この憲章の当事国政府は、その国民に代つて次のとおり宣言する。

戦争は人の心の中で生れるものであるから人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」(国際連合教育科学文化機関憲章より。傍点引用者)

冒頭のこの一節は、第二次世界大戦末期、父をフィリッピンのセブ島で失った私に、衝撃的な感動を与えた。「そうだこれなんだ！一人一人の心の中に平和のとりでを築けばいいんだ。教育だ。教育にたずさわることだ。」と心の中で叫んだ。一五才の私は地獄の底で銀色の一筋のくもの糸を見出したように思った。人の心の中に「平和のとりで」を築くことができたなら、人類は、ガンダータのように天国を目の前にみながら、再び地獄に真さかさまに落ちることはないのではなからうかと考えた。

教育学部を卒業し、使命観と情熱に燃えた

私は率先して、農村の学校に入って行った。農村でなら(真の教育)のできる(場合)があるのではないだろうかという淡い幻想を持っていたのだ。また、私の育った山すその小学校や、中学校での楽しかった生活のノスタルジーを感じていたこともたぶんにあった。

私は義務教育九年間を栃木県の片田舎で送った。未だ戦後の苦境の時代で、物資も乏しかった。貧しかった。小学校低学年のころは校舎にガラス戸がなくて、にわか雨が降ってくると、バタバタと戸板を打ちつけるという教室もあった。冬の寒い日もストーブはなく、寒さで勉強ができなくなると「おい、勉強はヨシタ。みんな外へ出ろ。裏山で陣取りだ。」と先生が言う。われわれは歓声を上げ、一もくさんに外へ飛び出したものだ。遊びがあった。生産活動(創造)の場もあった。稲を植えたり、学級農園にサツマイモを植え、秋に収穫をした。土との直の接触。晩秋の畑の冷やりした土の感触を素足で楽しんだものだ。農家の子供が大部分だったので、イモ掘り自体は目新しいものではなかったが、大きなイモがヒョッコリ顔を出すと、ときならぬ歓声があがった。学級農園は、各学級で独自の作物を植えつけ、収穫物は、ホーム・ルームの時

間や技術家庭の時間に、われわれの胃袋の中に吸収されたり、あるいは、近くのお店で換金され学級費を補った。また、学校には学校林があり、全校生徒が腰弁をさげて、一日がかりで植林に行ったり、下草刈りに行ったこともある。校長も自らかまを握り、われわれと共に働いた。校庭では、校長が植木バサミでチョイチキョキンと垣根の手入れをしているのどかな姿も、授業中、校舎の窓ごしによく見られたものだ。古き良き時代のなつかしい思い出である。自由な時代だった。

しかし、われわれが義務教育を受けた時代は、戦後教育史において、黄金の一ページとも呼べるのではなからうか。

広島、長崎に原爆が投下されて終戦を迎えた時、明治時代から連綿と続いてきた複線型の学校の動きが、一時的にハタツと止まったのである。そして、「アメリカ教育使節団」によって勧告され、占領軍の「指導」によって発足した「六・三制の新教育制度」は、近代教育が求め続けてきた「中等教育」をもすべての者に解放し、わが国における(第二の教育の創造の時代)を現出せしめたのではなからうか。

私の記憶にある教師たちは生き生きとして

いた。自発的に地域研究会を結成し、地域の問題とぶつかり、子供に接していたようだ。たんに教壇に立って、知識の切り売りをしていたのではなく、教師自らが勉強していたのだ。そのような姿勢は、地域の子供会活動やクラブ活動を通して、われわれに脈々と伝わってきた。われわれも生き生きと活動した。今から考えてみると、われわれ生徒は教師によって動かされるマリオネットではなかったのだが学校が楽しかったのである。

しかし、子供たちに、私の過ごしたような「楽しい学校時代」を送らせたいと思つて飛びこんだ農村の学校も、テスト体制の例外ではなかったのである。農村の子供たちも、大戦時代、家庭教師として接した都市の子供、附属中学校の生徒と何らかわるところはなかったのである。他人をけ落として生きて行くという社会体制の中で、テストの点数を一点でも上げてゆこうと考える子供か、無気力な子供が大多数だった。

私の勤務していた学校では小集団指導にとりくんだ。しかし、それは焼石に水であったのだ。子供たちが集団の中で個を伸ばし、個性が集団を伸ばし、社会の問題に目を向けるよう導くべきだったのであるが、結局は、グル

ープの人間の相互協力や刺激によって、グループのテストの平均点が、他のグループと比較して何点上だったとか、クラスのテストの平均点が他のクラスと比較して、何点上だったかという、与えられた体制内での「学力の向上」ということに終わってしまったようだ。小集団指導の持つ一つの限界であったように思う。

イスラエルのキブツに「理想的教育」が行なわれているのではないかという秘かな期待を持って、教育の場を離れてから四年の歳月が流れた。今、静かに教育の現場における私の三年間の実践をふり返ってみた時、資本主義体制下、個人競争の原理に出発点をおくテスト体制に反対して、小集団指導にとりくんだものの、結局は、技術革新の時代に産業界が教育界に要求してきた、日本工業規格（JISマーク）の人間製造にひたすら奉仕していたことに気づくのである。〈教育愛に燃えて〉とか〈使命観に燃えて〉子供に接し、組合運動に参加したのこのと云ったって、私は、結局、子供たちを（生の人間）としてではなく、〈商品〉としてあつかっていたのに過ぎないのではなからうか。

× × ×

「秋田県から集団就職で東京に出てきた田口君は「なんだかんだいってヨ、先公は俺たちを売りとばしたのさ。あっせん料なんてたんまりもらったろーさ。それでもうパイバイさ。俺たちがどんなに労働酷使されようとな。とにかく売っちゃまえば、それでいいのよ。人間なんてそんなものじゃないよ。だからあいつら親切そうな顔してケツカルけど人間じゃねーよ」とどなるように言う。」（野本三吉著「不可視のコミュニティ」傍点引用者）

私は、心の中で「いや、そうじゃない人もいるのよ」と叫びたい気持もあるが、率直に受け入れるより他ないようである。公共の義務教育学校で、いくら熱心に子供たちと取り組んだとて、それは結果的には子供を〈商品〉あつかいしてしまうのだ。

子供と呼ばれる可能性を秘めた人間に、産業界が要求して来た〈規格というわく組〉を与えて画一化してしまうのである。子供の「なぜ」とか「おや」という創造に結びつく好奇心や疑問を大切にしないで、一握りの持てる者の利益を守る社会に適應できる処世術を身につけた者にしてしまうようだ。「教育基本法」が明示するような「真理と平和を希求する人間の育成」ということは死文と化しているように思われる。

るようだ。

「持てる者」が存在する世界では、どこでも同じであるかも知れない。早ければ一月末に来日を予定されているイギリス系ユダヤ人のアラハム・ベン・ヨセフ氏は、彼の著書で三〇世紀の時点に立ち、二〇世紀の教育について、

「われわれの観点からすれば、当時の教育は人々を賢くするよりは、意図的に無知にしておくよう目論まれていたようだ」（Ancient History: The Twentieth Century）

と言う。デュローイの言う「形式的教育」、即ち、教師という指導者と児童、生徒という被指導者が教材を媒介に結びついている教育は存在するが、世界中、どこにも真理と平和を希求する〈真の教育〉がおこなわれている〈場〉はないのではなからうか。

今こそ、われわれは制度化された「公教育」に「ノン」を表明しようではないか。そして〈真の教育〉のできる〈場〉を創造してゆくのではないか。

小・中・高・大学の卒業式で必ず歌われる歌がある。「仰げば尊し」である。

仰げば尊し、わが師の恩

教への庭にも、やよ忘るな
身を立て名をあげ

やよ はげめよ
今こそ 別れめ
いざ さらば

（傍点引用者）

明治十年代より、八〇数年間歌い続けられてきたという歌。「仰げば尊し、わが師の恩」があらわす〈垂直的人間関係〉「身を立て名をあげ」があらわす〈立身出世主義〉。たとえ「時代がずいぶん変わった」と言っても、資本主義という私有制を認める社会、〈私有観〉のある社会では、本質的なものは変わっていないのではなからうか。
われわれは、今こそ、「仰げば尊し」に別れをつけようではないか。

「教育」ということば

「学育」ということば

九年ぶりに「教育実習記録簿」をひっぱり出してみた。なつかしかった。最初のページに「教育」についての銘言が、英語で三つ記

されていた。

▼教育とは、人々が知らないことを教えることを意味するのではない。愛情、熟視、注意、教訓、賞讃、とりわけ実例により為される、忍耐のいる継続的で困難な仕事である。——ジョン・ラスキン

▼教育とは、賞讃すべきものであるが、知る価値のあるものは何も教えられないということをや折々思い出すことが望ましい。

——オスカー・ワイルド

▼学校や大学で教つたものは、教育ではなくて教育の手段である。

——ラルフ・ワルドー・エマソン

初めての教育実習を控え、期待と不安の交錯する中で、教育とは何かを私自身に問いかけるものとして、おそらく記録したのである。教育とは「知識を教えること」であるなどとは誰も言っていないことに気づく。

しかし、「教育」という言葉に接した時、われわれが最初に連想するのは「学校」であり、そこでは「教師がいて児童、生徒、学生に知識を教える」ということであろう。当時、「教育」とは「教える」ことではな

くて、子供の「自主性」「自発性」を尊重して、彼等の成長を助けることではないかと考へつつも、私自身、教育の現場においては、〈教師から生徒へ〉という一方的な回路しかなかったようだ。たとえ「あの先生はおっかないけど、俺達の話しを聞いてくれるし、職員会議にも俺達の考え方を反映させてくれる」とみられても、自らを教師と思ひ、子供を被指導者と見ているかぎり、管理職手当をもらっている校長や教頭とかわりない〈クラスの管理者〉でしかないように思われる。

私たちは、「子供」とは何かを、もう一度とらえかえす必要があるのではなからうか。いや、人間とは何者かということをとらえかえすことも知れないか。

「二〇世紀は子供の世紀である」と説いたのは、たしかスエーデンのエレン・ケイだったと思う。彼女がそう叫んだ時の子供の状況は教室では教師の鞭がとび、工場では子供が酷使されていて、「保護されなければならぬい者」ととらえられたのではなからうか。確かに、当時の歴史的状況においては子供は「保護されるべき者」だったかもしれない。また、子供は生物的にみたら保護されるべき一面ももっている。しかし、同時に可能性を持

ったバイタリテイにとんだ、一個の独立した自発的な個体ともとらえるべきだったのだ。

「子供」と「大人」の区別は、何によつて為されるのだろうか。生物的年令とか知識、経験の多少だろうか。子供も黙っていても生物的年令はとつてゆく。知識も経験も鋭敏な感覚でどんどんとらえてゆく。ただたんに、生を受けてからの「時間の長さ」で「大人」と「子供」を区別することは不合理である。

「子供」は実に好奇心、機智、バイタリテイに富んでいる。私が教育の現場に就いた時、中学一年生を受け持ち、そのまま「持ち上がり」で三年間彼等と過した。男一六、女二四というアンバランスなクラスだった。中学一年生の男の子などは、小さなレイディ達と比較すると、まだまだやんちゃでいたずら小僧という感じだった。結構にぎやかなクラスだった。ところが二年生の夏休みを境にクラスの雰囲気、ガラツと変わる。個人差はあるがいたずら小僧たちがたくましくなる。男らしくなる。そして、恋も芽ばえてくる。そのころクラスのおちやめさんが、冷やかしを半分交えて言いきたものだ。「先生、Mとなー、T子はナー、仲がいいんだぞ」と、クラスや校内で、いくつかのカップルができあ

がるのだ。二年の後期になって気づいたのが、グループ内での個人の座席は固定して、話し合いによつて一週間とか、一カ月を単位に交代していた。入学当初は、背の順で男と女で並んでいたものがずいぶん変わったものだ。子供達はダイナミックに動き出したのだ。「初な気持」「はじらい」「そばにいたい」ということを座席の交代ということで、スムーズに解決していたようだ。男女の比率のアンバランスによる不都合も、もちろんこれによつて解決されていた。ほほえましい光景であった。四季を通しての窓側の席と廊下側の席の恩恵も、みなが享受できるように彼等の知恵を結集して、前後、左右に移動していたことは言うまでもない。

これは大人が干渉しなければ、子供たちは自由に発言し、ダイナミックに行動するという一例である。彼等は大人より液体の状態にあり、観念の遊戯をせず行動に移せる、ある意味では純な革命家たちではなからうか。われわれも、大いに彼等から学ぶものがある。また、子供は将来を創造するために過去の文化を短期間に大人より学ぶことが必要だ。したがって、われわれは人間という次元で、相互に学び合い影響し合つてゆく関係にあるの

ではないか。そうでなかったら、文化は保守的になり、前進の速度がにぶる。「教師から生徒へ」という垂直的な一方的回路の関係は否定され、新しい「真の教育」の「場」が創造されなければならない。

山岸已代蔵氏は教育革命について次のように述べる。

「信仰と変らない教え込み方式の宗教的教育を抹殺し、すべて、究め、考え、創造し、実験する真の科学『けんさん学習方式』に革命する。」

「『教育』というよりは『学習』といった方が至当ではなからうか?」(『Z革命はあなたの身边に!』一九六一年)

彼は「教える」という垂直的な教師対子供の関係を否定し、人は「学び育つてゆくのだ」という「自発的な行為」として教育をとらえたようだ。この「学習」という構想の中に、未来の「真の教育の原点」があるのである。

「真の教育」とは、正に学び育つてゆく自発的な行為ではなからうか。だとすれば、現在の公教育諸機関において、終身雇傭制の上に

あぐらをかいている教師というものは否定されるべきである。

「ぼくは教師という存在の固定化を否定する。最も多くの耐えられなかったのはそれなのだ。人は自らの内から発してくるものによつて学ぼうとする。それはごくあたりまえのことであり、義務とか権利以前の自発的行為だとぼくには思われる。いわばたえることのない「自己教育」以外にはないという気持なのだ。」

(野本三吉著『不可視のコミュニティ』)
何のための絶えざる「自己教育」なのだろうか。よりよいものを求めて、より高きものを求めての自己教育ではなからうかと私は思



う。他の言葉で言つたら、人間にそなわつた「崇高本能」を純粹にかぎりなく満してゆくこととする(「自発的行為」ではなからうか。このことは、私有制を認めた社会では不可能なことではなからうか。人間にそなわつた「崇高本能」を純粹にかぎりなく満たしてゆくためには、所有の無い社会(「コミュニティ」)を前提とする。

われわれが、主体的に自発的に「学び育つていく場」を創造する時に、それを成立させる社会的基盤を明確にしておかなければならぬ。今、私の頭の中ではっきりしていることは、所有関係の無い親子関係、所有関係の



無い真に自由な男と女が存在しているコミュニティである。そこでは主人とか家内とか言うことは消滅している。「女は、男より能力的に劣っているのだから、黙って一歩さがつて男について来れば良い」というような考え方が支配してはならない。

男と女は優劣の対象で論じられるものではない。女より男の方が優つているという発言に接すると、私はいつも東京オリンピックの体操競技を思い出す。チェコのベラ・チャスラフスカの演技である。同性の私がほればれとする豊かな曲線美のきびきびとした肢体が段違い平行棒、あん馬、マット等の上で跳動し、律動する。彼女の演技には正確で緻密な



計算が感じられ、一センチの誤差も無駄もないように思われた。人間の技の極限を極めていたのではないかと思われた。美、そのものと思われた。

彼女の演じた演技を、やはり東京オリンピックで大活躍した小野喬選手に求めることは不可能である。また、チャストラフスカに小野の演技をやるように求めることも絶対不可能である。二者を優劣の対象にして論じるのは愚の骨頂である。男と女は持てる質が違うのでなくて、そのそなわった能力、特性を人間として十分に発揮でき、調和し、創造してゆける社会を理想の「コミュニティ」とする。

学校という名の

つかない学校

非形式的教育の場の重み

四年前、第三次キアツ・タリヤ・グループ員として、一年を共に過した知子が、今年の九月、再度イスラエルに渡った。「疲れたからキアツで休養してくるワ。キアツの集団教育も、もっと研究したいしネ」と言って。

キアツ。われわれは準メンバーとして受け入れられたものの、アウトサイダーでしかなかったのだが、何か、心のやすまる場所がある。それと同時に、行動のエネルギーを与えてくれるような気がする。四年間にどのような変化をげたかしらと、その後の動きを同じ母国語で伝える彼女の便りを心待ちにしていた。十月下旬、第一便が届いた。

「私の部屋は、日本人部落の、つまり我々の男性が使っていた住宅の上の方の一番手前の部屋でした。あの二棟には、今だれも住んでなくて、ひっそりとしたものでした。ゲルダ（注、彼女の里親）の所のお客さんという待遇で、彼女が部屋の掃除をし、ベッドを備え、お花とくだものもそえて待っていてくれたわけです。私たちの教室だったベイト・イツハックとグリさんの仕事部屋にあった建物も姿を消し、そのあとに大きな病院（老人用の）が建てられつつあります。マサヒコさんが住んでいた方の何棟かのツリフ（注、木造の宿舎）も消え、バス停のすぐとなり、これまた大きなマスキルト（注、書記局）を建築中です。メンバーの住宅も、新しいのがどんどんふえ、目下修理増築中。私たちの住

んでいた宿舎は、ボランティアの人が使っているようでした。あのずっと前、東の方にモサド（注、中学・高校を一つにしたような学校）の生徒用の二階建ての宿舎が四棟ほどできてますし、とにかく、ずいぶんと変わってきました。つい二〇日ほど前に新しい乳児の家がオープン。ものすごく大きくて立派なものです。場所は、バレー・コート、おぼえている、子供の家の近くにありました。そのうしろの方です。それと、バスケット・コートに近くて、井戸の方に向かって左手の奥に、これまた大きな体育館を建築中です。」

目まぐるしい程の発展を伝えてきている。われわれが滞在していた時のキアツ・タリヤは、住民が約六五〇人で、創立二九周年を祝っていた。彼女の手紙を読んでいて、私有を排した社会の力強い発展が確認され、将来の理想社会、すなわち、所有の無い社会建設の細胞づくりに、確信を持ち喜びを感じている。私は所有の無い社会、「コミュニティ」建設のために自己投金をしたいと思う。

ところで、コミュニティがムーヴメントとして、明日の社会建設の力となるには、第二世代、すなわち、後継者の育成に成功しなければ

ならないと考える。ロバート・オーウェンやサン・シモンの時代やその影響を受けて試みられたユートピアの実験が完全なる失敗があるいは、生き残っていても、隠者の閉鎖的な集団として社会から孤立しているのは、結局、後継者の育成に成功しなかったからではなからうか。

最初のキアツがヨルダン河の畔に建設されたから約六〇年、シオニズムという民族主義と社会主義の理想に支えられて、今日も、キアツ・ムーヴメントとして存在し、内部から膨張、発展しているのは、真に第二世代の教育に成功したからに他ならないと思う。

「今日、古いキアツでは三世代のキアツ・メンバーが住んでいる。祖父母が、まだキアツで活動している時に孫娘の結婚がみられる場合がある。」(Children in Collectives)

キアツは後継者の育成に成功したのである。日本でも、イスラエルにキアツが誕生したころ、時を同じくして、コミュニティの萌芽となる社会集団が誕生した。また戦後誕生したコミュニティも力強く根ざり始めたようだ。そして、コミュニティ・ムーヴメントの形をとり始めている。しかし、この動きが「真の社会」

建設の力となり得るためには、後継者の育成に成功しなければならぬ。

ヤマギシ会運動について言えば「(学育)構想に成功するかどうかが運動体として生きながらえるかどうかを決定すると思う。学育構想がキイ・ポイントなのである。

私は先に、「(真の教育)」とは人間にそなわった崇高本能を純粹にかぎりなく満たしてゆこうとする自発的行為ではなからうかと結論づけた。もし、そうであるなら、よりよいものを求めて、常に前進していこうとする人間にとつては、終生、あらゆるものが学ぶ対象になる。北海道の荒々しい男性的な層雲峡と、せんさいなおいらせ渓谷、乾いた岩砂漠のネケウでさえも、何かにうたれ、学ぶ対象になるのではなからうか。人間だけでなく自然もわれわれに関係し合ってくるのだ。してみると、常によりよきものを求めている人間にとつては、もはや学校という名の学校はいらなくなってくるのではなからうか。

そこで、私はデュレイの言う形式的教育(学校)を成立させる非形式的教育の場(あらゆる生活の場)の環境づくりが、まず先行しなければならぬと思う。「学校と社会は違う」という言葉がコミュニティでは通用してはな

らないのではなからうか。コミュニティは、人間の崇高本能をかぎりなく満たしてくれる場になるべきであると思う。子供を、ただ静かに観察しているだけでなく、われわれが学び育っていかねばならぬ。

「学ぶことが教えることであることを再確認したい。われわれは自ら学ぶことによって、子どもたちに学ぶことを教えたい。」(「可能性に生きる」斎藤喜博著)

われわれが学び前進している脈動を子供達に伝えたいものである。私は現在ヤマギシズム生活中央試験場にいるが、仲良し班を通して次のような提案をした。

提案

「(学育)」という言葉は、子供にだけ適応されるものではありません。われわれ大人も終生学び育っていかねばなりません。従来「学校と社会は違う」という言葉が使われてきましたが、学校と社会は同じであるべきです。産業革命により、家庭から知育面の教育が分離され、公教育制度を生み出しました。さらに技術革新の時代を迎え、知育教育分野における原子化がおこなわれています。中央

教育審議会より出された「期待される人間像」も技術革新の時代に機械の一部として働く規格人間の製造であるようです。日本工業規格（JISマーク）に合う人間の製造であります。われわれは、ここで分化し、原子化している教育の場を再び統合すべきではないでしょうか。すなわち、ヤマギシズム・コミュニケーションという生活の場を学校という名のつかない学校にするのです。そこでは、人間の持つ崇高本能をかきりなく追求できるのです。われわれは、子供に「学び育ちなさい」という前に、われわれが学び育つていこうではありませんか。春日（注、ヤマギシズム生活中央試験場の別名）を学校という名のつかない学校にしていこうではありませんか。その具現方法の一つとして、左記の事を提案致します。

一、中央調正機関内に図書館を設置すること
一、図書館設置準備委員会、及び図書選定委員会を設けること
(一九七一年一月二十九日)

ヤマギシ会の春日コミュニケーション自体がすでに学校という名のつかない学校、常に自己変革をしてゆく場になってはいるのであるが、文化的にも知的にも満たされたいし、満たした

いので提案したのである。現在の段階においては、個人で注文した本はすえ置きにされる本とパンツではどちらが大切かという比較はできない。どちらも大切なのである。が、パンツの方が優先される。
しかし、現在の社会は、今までになかった加速度の速度で変化している。

「教育が社会的・地理的に分散されることは必要であるが、同時に時間的にも分散されなければならぬ。知識が急速に陳腐化し、人間の寿命が延びたので、若いときに学んだ技術で年をとってからも役立つものが少なくなっていることは否定すべくもない。それゆえ、超産業化社会における教育は、年齢にかかわらず、一生を通じて必要に応じて受ける教育というふうにならなければならない。」

もし、学ぶことが一生を通じて行なわれるならば、子供を全日制の学校に義務的に通わせる理由は少なくなる。」（『未来の衝撃』A・トブラー著、徳山二郎訳、傍点引用者）

われわれは、人間にそなわっている崇高本能を満たしていくためにも、コミュニケーションが時代の試練に耐えていくためにも、教育の（時間的分散）を考えなければならない。

最近、後期中等教育の重要性が叫ばれ、高専などが誕生しているが、これは、世界的に不足している中堅エンジニアの養成、ハンディな人間の育成である。現在の社会に適應する人間を製造しているのである。それも必要であろうが、教育は終生おこなわれるものであり、過去、現在志向から未来志向へと移ってゆかなければならないだろう。終生を通して、生活の場、そのものが学ぶ場になるべきだと思ふ。生活の場の中に（各種学校（各種セミナー）（講演会）（各種研究会）が自発的に次々と誕生していてもよいのではなからうか。ちょうど明治一〇年代に、日本各地に無数の塾が誕生したように。宮原誠一氏は、

「中等教育が上流階級のためのものとして制度化されていきつあった時、学校制度の枠のそとで、地方の青年のあいだに教育要求の清新なめざめがあり、これを青年たちじしんの力で学習運動にまで組織する」となみが展開され、そこに今しておもえば国民的な中等教育の正統な萌芽とみるべきものがうまれていた。」（『青年期の教育』）という。

われわれは、二一世紀に立つときには「一九七〇年代をつうじて、後期中等教育が一握

りの持てる者に奉仕するものとして義務教育化されていきつあったとき、学校制度の枠のそとで、（真の社会とは何か）（真の教育とは何か）を模索している人々のあいだに、清新なめざめがあり、これを彼等自身の力で学習運動にまで組織する」となみが展開されそこに今しておもえば人類的視野に立った終生教育の正統な萌芽とみるべきものがうまれていた。」と書きたいものである。

民族主義を超えて

「Victor Cherbuliezによると、紀元前一五〇〇年から紀元一八六〇年までに、恒久の平和を保証すると思われながら平均二年しか続かなかった約八〇〇〇以上の平和条約が締結された。」（Avraham Ben Yosef "Ancient History: The 20th Century"）

何と多くの平和条約が結ばれ、破棄されたことか。今世紀になっても、国際連合憲章のいう「二度まで言語に絶する悲哀を人類に与

えた」第一次、第二次世界大戦があった。そして、局部戦は、朝鮮、ベトナム、中東と、あいかわらず絶えることがない。国益を守るためにとか、民族の生存のためにという大義名分のもとに、「正義の怒り」と称するものがぶつかりあっている。ナショナル・エゴイズムがぶつかりあっている。戦いに勝つても負けても、尊い生命が失なわれ、無数の女、子供や男たちが泣く。失なわれた一人の兵士に何人の悲しみの涙が流されるだろうか。

われわれは第二次大戦後、平和国家にうまれ変わった。日本国憲法第九条により交戦権を否認し、戦力を保持しないことを宣言した。確かに、この平和憲法が果たした役割は大きかったにちがいない。キブツ研修生の世話係で、多くの日本青年に接していたイスラエル人が私に言った。「ミツコ、日本の青年に共通して言えることが一つある。みんな、戦争を知らない平和主義者だよ。」と。私は驚いた。そして、日教組が戦後に果たした役割を再認識した。日本の教師達は、第二次世界大戦で極に達した偏狹な日本のナショナリズムを二〇年にして、消し去ったのだ。正に奇蹟をおこなったのではないかと思つた。

戦後の国際理解の時代に教育を受けたわれ

われは、しばしば国籍の無いコスモポリタンだと言われる。そして、この反動として最近道徳の時間等で「真の愛国心とは」というようなことがとりあげられている。戦後の「特設道徳」と言えども、戦前の修身科と決して断絶しているのではない。現在の時点で再び「愛国心」ということがとり上げられることに對して、私は危惧の念をいだく。

日本国憲法第九条は、いつのまにか、なしくずしになり、戦前よりも強力な軍隊である自衛隊が存在し、われわれは日本という「火薬庫」の上で太平ムードに酔い、安眠をむさぼっているように思われる。「夫や子供を再び戦場に送るな」、「もう二度と、戦争の苦しみをなめたくない」という戦争体験者の感情論によって、かろうじて改憲阻止に成功しているように思えてならない現状である。感情的反対というのは、案外「もうい」のではなからうか。感情というものは、時間がたてばうすれてゆく。

私の戦争体験も、かすかなものである。東京の下町で防空壕に逃げ込んだことか、町の中を走りまわる消防車、疎開先の父の実家で父の死亡通知の届いた日のこと等で、これらはみな静かな絵画として私の中に残っている

るだけだ。アクチュアルなものはない。

しかし、われわれ第三次キブツ研修生は、イスラエル到着後、二週間目に六日戦争（一九七七年六月五日に始まった中東戦争のイスラエルでの呼び名）に遭遇した。アクチュアルなものだった。駐日日本大使館より退去勸告が出され、われわれはどのように対処するか話し合っている最中に電撃的に戦争が始まってしまった。ヘブライ語のラジオ放送は理解できないし、戦時中のニュースなどは信用のおけぬものと知っていたために、その時の緊張は筆舌には尽せない。キブツの生活は緊張の中にも一糸も乱れず営まれていた。われわれは戦闘機の飛び交うなかでも、午前中はリング園で働き、午後はヘブライ語の勉強を続けていた。開戦初日、ヘブライ語を学習している最中に警報が鳴り、われわれは防空壕へ逃げ込んだ。日本青年の顔は蒼白だった。約一時間半後に警報はとかれたが、何と長く感じられた時間だったろう。この間中、私の頭から離れなかったのは、

「フランスにおいて、さらに世界全体において、ユダヤ人がひとりでも自分の生命の危険を感じるようなことがある限り、フランス人もひとりとして安全ではないのである。」（ユ

ダヤ人「サルトル著」

という一節であった。ユダヤ人問題は、われわれの問題なのである。二〇〇〇年にも及ぶ長い間の迫害にあり、ついに父祖の地に祖国を再建したユダヤ民族。シオニズム運動という民族主義。私の問題としてとらえねばならないことに気がついた。

キブツには、いろいろな国の人々がやって来る。私は同僚だった先生に次のような手紙を送った。

「今日はパルデス（果樹園）で働きました。イスラエルも冬です。日本と比較したらはるかに暖かいですが、寒さは同じように感じさせられます。晩秋、あるいは初冬のような真青な空と冷たい空気、レモンの香り、実にさわやかな気分で働けます。レモンの葉の緑と太陽の恵みをさんさんと受けている黄金色のレモン。自然の美しさ、偉大さをひしひしと感じます。何か一枚の明かるい平和な絵をみているような感じが致します。しかし、その静けさも、しよつちゅう耳をつんざくような戦闘機の爆音で破られます。そして、いやでも現実にはひきもどされます。十時から三〇分間休けいの時間です。暖かな日だまりで、コ

ヒーをすすりながら、各々がたずさえてきたサンドウィッチをほおばりながら、おしゃべりをします。国際色豊かな顔ぶれです。人数は一五〜六人です。フランス、スイス、アメリカ、イスラエル、日本人と北欧から来た人達という組合せです。共通の言葉は英語とヘブライ語です。語学の不得意なわれわれ日本人も結構楽しくやっています。」（一九六八年一月二〇日付）

われわれは、キブツでインターナショナルな雰囲気を楽しんだ。キブツは、いろいろな国の人を受け入れる。開放的で寛大な一面を持っている。労働力不足を補うということではなくて、流浪の民だったユダヤ人の経験がそうさせるのではないかと思った。キブツニツクが「われわれ離散したユダヤ人は、その土地で、その民族の中に同化しようとしたが同化させてもらえなかったのだ。」と言ったのを覚えている。

しかし、インターナショナルな雰囲気の中にいながら、私は「やっぱり、現代は民族主義の時代なのだ。私はイスラエルの地に骨を埋めることもできる。しかし、私をより活かすためには、日本に帰って働くことではなからうか。」という結論に達してしまった。

八月末日に帰国することを決心し、果樹園での最後の作業をやっている時に、ソ連とワルシャワ条約機構軍がチェコに侵入したというニュースが伝えられた。ショックなニュースであった。「国際共産主義運動も何もあったものではない。結局は民族主義の時代でしかない。われわれは時代の制約を超えて生きることはできないのではないか。」という感を増々強めてしまった。

現代は民族主義の時代である。しかし、だからこそ、われわれは時代の制約を超えて生きなければならぬのではなからうか。偏狭な民族主義者であるよりは、国籍の無いコスモポリタンを私は選びたい。戦後、教育の現場にとまされた、青少年赤十字運動やユネスコ活動等のインターナショナルな感覚は大切に引き継いでいきたいものである。もちろんコミュニティも例外ではあり得ない。民族主義を超えていかなければならないと考える。

フィリップに balan加里ーと呼ばれるコミュニティ運動が生まれた。創設者の一人で、イスラエルのキブツ・カプリに滞在していたマリウス・ダイアズ氏より山岸会国際科に次のような手紙が届いた。

「いくつかの質問をしたいと思います。約二カ月前に、インドから一人の男が到着しました。彼も自分の国にコミュニティを建設することを考えています。われわれは彼の計画を徹底的に検討しました。そして、その計画を共同してやることに同意しました。われわれはインドとフィリップにコミュニティを建設するだろう。そして、それは一つの組織体になるだろう。人事交流もやる予定です。われわれのコミュニティには、新しい性格、すなわち民族主義を超えた (transnationalism) 性格がつけ加えられねばならないと思います。民族の違いを意識することなしに、理解と平和のうちに、われわれの共通のゴールである人間の向上のために国境や国益を超えて働く能力です。

あなたがたはすでに創設され、われわれはまだ計画の段階にありますので、われわれはあなたがたの経験から多くを学ぶことができ、あなたがたは、他の国々にコミュニティを組織するにあたり、決定的な助力になるでしょう。

外国にコミュニティを建設する計画があるかどうかお知らせください。インドとフィリップが解放されています。われわれはこのこ

とを考慮しておきます。これらのことは、たいてい困難なことではなく、最も重要なことは、われわれが超国家的規模で組織するかどうかを決定することにあると思います。」（一九七一年五月三一日付）

ヤマギシ会では、人種のルツボであるブラジルにコミュニティを建設しようとしている。渡航者の人選も終わり、渡航準備も着々と進んでいる。また、昨年、十二月八日をきしてヤマギシズム拡大のための英語特講も組織された。民族主義を超えた（世界コミュニティ連合）の結成ということも、あながい近い将来におこなわれるのではないかという感じがする。いや、民族主義を超えて、地球を Home Plane と考えるコミュニティ連合を能動的、積極的につくっていかねばならないと考える。

われわれは世界各地の既成のコミュニティやこれからコミュニティ運動を展開しようとしている一群の人々との（関係づくり）（接触）をしていかなければならない。

フィリップの balan加里ー・ムーヴメントの創設者の一人であるマリウス・ダイアズ氏も今年の末来日予定でヤマギシ会に滞在を

希望している。

さきごろ、アメリカの「同胞社会」の出版
社より数さつの資料が送られてきた。五〇年
の歴史のあるクリスチャンのコミュニオンであ
る。子供たちは「われわれの子供」として教
育されているらしい。

誰だったか、キプツのことを「一大文化学
園都市村」と言った事を記憶している。キプ
ツにはシオニズムという民族主義や社会主義
の持つ限界が感じられるが、すばらしい社会
であると思う。規則や法律で縛るのでなくて
人間らしい生活のできる社会である。「同胞
社会」も何かすばらしいものを持っているに
違いない。また、フィリッピンとインドに建
設されるであろうコミュニオンも民族主義を超
えた将来の「真の社会」の細胞になるかも知
れない。ヤマギシ会コミュニオンも外国からの
人々を受け入れる体制ができています。現在、
三人の韓国青年が滞在、研修中である。韓国
でも、ヤマギシイズムが根付き、コミュニオン
ムーヴメントとして展開されつつある。これ
らのコミュニオンの中で若者の交流がおこなわ
れ、インターナショナル・セミナーなどが開
催されたらすばらしいと思う。これは、一カ
月という旅行の規模ではなくて、一年、ある

いは二年滞在するのである。人を通して国と
人々を知るのである。国境などというものは
人間の観念が創りあげたものであるというこ
とが実感として感じられるだろう。

私は若者の「(国出)」を大いに勧めたいので
ある。

「どうか一度、日本を飛び出してみてくださ
い。これからだったら、海外に出られるチャ
ンスはたくさんあると思います。大きな夢を
持つてください。体をきたえておいてくださ
い。外から日本をながめることも意義のある
ことだと思います。『愛国心とは何か?』『私
が郷土に、世界に、あるいは人類社会に貢献
出来ることは何か?』ということをも、各自が
じっくりと広い視野から考えることは大切な
ことと思います。」(教え子への手紙—一九六
七年一月二三日付)

コミュニオンの学校では若者の「(国出)」を組
織的に位置づけたいものである。青年を冒険
の旅に出したいものである。今日、今までの
規模でなかった若者の国外移動の旅が見られ
るという。われわれは、若者の大移動をさら
に進めたいものである。

所有関係のないコミュニオンの建設のために
は知的革命が必要とされる。

「たぶん、歴史上のいかなる革命もその理想
的な目標の四分の一も達成していない。革命
の過程でほとんどつまずき、時には全過程退
却し、逆行した。それは人間の精神構造の当
然の結果である。」(A. Ben-Yosef History:
The 20th Century.)

男にも女にも巢食う、革新のなかの保守的
心情……。

「現在の「(関係)」とちがった「(関係)」に入る
ことによつて『社会体制』そのものが変革す
ることは当然のことであつて、そうであると
するならば「(関係)の変革」こそ、ぼく自身の解
放と、社会の解放とを同時に成立させうる最
も要になるのではないか、と現在のぼくは考
えるのだ。」(野本三吉著「不可視のコミュニオン」)と
いう一節を、私は静かに考えている。

ともあれ、絶対愛にもとづいた「新しい人
間関係」の創造が、急務のように思われてな
らないのである。(一九七一年一月一九)

(筆者は、第二次キプツ研修生、現在、三重県春日の山岸会
の根拠地に住んでいる。)